

琉球大学学術リポジトリ

[記事](研究発表会要旨)さとうきびの品質取引初年度の
の結果とこれからの対応

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 垣花, 郁夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017336

6. さとうきびの品質取引 初年度の結果とこれからの対応

北部製糖株式会社 垣花郁夫

平成6/7年度より、さとうきびの品質取引が実施された。初年度は沖縄県は基準糖度より低く、きび作農家の実質手取額が減り、鹿児島県では逆に増える結果となった。

さとうきびの品質取引は5ヵ年間の準備期間を経て、実施されたものである。北海道では昭和61/2年度より、品質取引が導入され、激しく生産性が向上している。農林水産省としては、同じ結果を期待したものであるが、さとうきびはビートに比べ、品質を左右する要因が多く、期待どおりの成果は上がらなかった。ウルグアイランド等による農産物の輸入の自由化に対応するため、糖業も合理化を求められている。さとうきびの品質取引の導入により、糖業の生産性を高め、合理化を図るのが目的であったが、結果として、きび作農家の手取りが減少し、農家いじめという誤解が生じている。

きび代の値上げが難しい現況では、品質取引は、農家の実質手取りを増やす一つの手法であり、前向きにとらえるべきだろう。

沖縄県と鹿児島県との品質格差については、単年度の結果だけで結論つけるのは難しいが、台風等の気象要因、さとうきびの品種の対応、施肥管理の影響が大きいものと思われる。

今後、この点を改善し、農家の指導を徹底する必要があるだろう。